

シネマ・チュプキ・タバタ 平塚千穂子支配人

# プロデュース作品『こころの通訳者たち』 と上映活動の繋げる姿勢

日本唯一のユニバーサルシアター「シネマ・チュプキ・タバタ」の平塚千穂子支配人がプロデュースを手掛けたドキュメンタリー映画『こころの通訳者たち What a Wonderful World』（監督：山田礼於）が10月1日よりチュプキで先行公開、22日より新宿K's cinema他全国順次公開中。2016年開館のチュプキは、6年間、上映作品に音声ガイドと日本語字幕を付けることを欠かさずに行うことで、障がいの有無関係なしに誰もが同じ映画を楽しむことができる空間を提供してきた。公開中の『こころの通訳者たち』では、平塚氏が長年手掛けてきた見えない人たちに向けた「音声ガイドづくり」の新たな挑戦に迫るとともに、「繋げる」ことを意識した上映活動の姿勢にも触れている。平塚氏に聞いた。

（取材・文：島村卓弥）

## 日本が遅れていた2000年

『こころの通訳者たち』の物語の中心となる平塚氏は、20年以上にわたり、バリアフリー上映・鑑



プロデューサー／平塚千穂子

バリアフリー映画鑑賞推進団体 City Lights CINEMA Chupki TABATA 代表

1972年生まれ、東京都出身。2001年にバリアフリー映画鑑賞推進団体 City Lightsを設立。以後、視覚障害者の映画鑑賞環境づくりに従事。2016年日本初のユニバーサルシアター CINEMA Chupki TABATAを設立。その功績が讃えられ、第24回ヘレンケラーサリバン賞を受賞。今作『こころの通訳者たち』にも音声ガイド制作者として出演。

賞の推進に取り組んできた。キャリアは、2001年に立ち上げたボランティア団体「City Lights」（シティライツ）から始まった。

「シティライツを立ち上げる前年の2000年、チャップリンの『街の灯』を目が見えない人に向けて上映するイベント企画に、スタッフの一人として参加しました。それまでは見えない人にお会いしたこともありませんでした。そのイベント企画自体は、諸事情により実現には至らなかったのですが、

見えない人たちの間に『今やっている映画を観たい』というニーズが多くあることを知りました。『そうした活動をやってほしい』と言われるようになった一方で、私は『すでにそういう活動をやっている団体はあるんじゃないの？』とどこか半信半疑でしたが、よくよく調べてみると、単発のイベント企画以外には案外そうした取り組みがないことが分かったのです。

そこで平塚氏は、海外にも視野を広げてリサーチしたところ、およそ20年前の2000年当時にも

かわかわらず、すでにアメリカでは100館ほどのバリアフリー映画館が存在していることを知った。「全米の多くの映画館では、公開初日から副音声と、字幕付きで上映していて、対応している作品のなかには『スター・ウォーズ』などの超大作もあり、見えない人たちがレビュー投稿までしている状況を知りました。ニーズがあるからこそ100館以上に普及していることや、単に日本が遅れているだけだということが分かり、日本でも特化した活動があっても良いのではないかと思うようになりました。

日本における見えない人たちの間では、どのようなニーズがあるのか。具体的な声を集めるために、平塚氏が着手したのは、メンバーリストの作成だった。作成当初でも100人弱が集まり、現在では1千人近くが登録するほどのリストに成長している。

「日頃困っていることや、求めるサービスを送ってもらっているうちに、実際に聞かなければ分からないニーズを知っていきま

たとえば、音声ガイドなしでもコレクションしているDVDを付いている音のみで楽しんでいる人や、反対に『このシーンだけはどうしても何が起こっているか分からないうから教えてください』という声、『吹替版で放映されるテレビ映画の情報を知りたい』という声などです。

### 『千と千尋』を観たい声続出

そんなある日、メーリングリストにひとつの投稿が送られてきたという。

「2001年の夏に『千と千尋』が公開されて、大きな話題になっていた頃、ある見えない人から『今（映画館で）観たい！』という投稿が入り、そこには『晴眼者の方に映画館に付いてきてもらって、耳もとでこっそり解説してほしい』という要望が書かれていました。その投稿はメーリングリストにあがったので、他のみんなからも『そのスタイルが良いから観たい！』という声が大量に集まったのです」。

要望を受けて、この耳もとでの



←鑑賞会



←映画館でマンツーマンペアで行っていた鑑賞スタイル

解説スタイルによる鑑賞会を、6人の晴眼者・6人の視覚障がい者のマンツーマンペア方式によって、池袋HUMAXシネマズで実施した。『千と千尋』の後も、『陰陽師』など話題作のたびに開催されるシテイライツの大人気企画となつていくにつれ、スクリーンを貸し切るスタイルに移っていった。

多いときには1回2000人が参加していたこともあり、エリアごと（新宿、池袋、渋谷、川崎、有楽町など）にチーム編成したり、映画好きのメンバーを増やしたりしなければ対応しきれないほどの人気を博した。マンツーマンペア方式も、解説の腕に定評がある1

人が複数（の見えない人たち）に向けるライブ実況の方式に切り替え、当時はFMラジオのシステムを導入して対応した。

「池袋HUMAXシネマズのヒューマックスシネマズをはじめ、チネチッタさん、ユナイテッド・シネマさんには大変お世話になりました。キャバが大きなテアトルタイムズスクエアも定番の映画館でした。シテイライツの方でも、色んな映画館で実施することで、見えないお客さんが多くいることや、彼らが今やっている映画を映画館で観たいと求めていることをまずは映画館側に知ってもらいたい思いがありました。今から10年

前には映画館にとつての観客の全く対象外でした。シテイライツの活動によって彼らの存在とニーズがじわじわと映画館側にも浸透していったはずですよ」。

### 一緒に観るからそのチュプキ

ようやく2016年には日本の映画業界でも、シネコンではスマホアプリなどを用いたバリアフリー対応の鑑賞スタイルが普及するようになった頃、平塚氏のもとには映画会社から音声ガイドづくりのオファーが続々と届くようになってきた。シテイライツの活動は15年目に差し掛かっていた。

「この頃は、今一度自分たちがやりたかったことは何かということを見つめ直す時期にいました。大手などの映画会社の作品はスマホアプリを使えば、誰でも観られるようになりましたが、ミニシアター系のインディペンデント映画は予算がそこまでかけることができず、まだまだ普及していません。文化庁の製作助成を得られれば、オフションとしてUDCastの制作費が出るといことはありま

すが、これも稀のケースです。私自身がミニシアター系のインディペンデント映画に影響を受けてきたこともあり、そうした作品を多くの人がなるべくとりこぼすことなく観られる機会を作るためには、シテイライツが続けてきた鑑賞会というイベント的なものから発展して、場所を創りたいと思うようになりました」。

そんな想いのもと2016年、シネマ・チュプキ・タバタが開業。シテイライツが主に見えない人たちを対象にした活動だった一方で、チュプキが掲げた「ユニバーサルシアター」という言葉には、その枠をこえ、聴こえない人、車椅子を使う人、小さい子ども連れ、様々な障がいを抱える人などありとあらゆる事情を抱えた人たちを対象とし、誰でも一緒に観られる映画館にする「想いを込めた」。「オープン当初は、障がい者のための映画館」という見出しとともに一部で報じられたこともあり、いわば「そうではない人（障がいを抱えていない人）は行ってはいけない映画館」というように残念

なことに思われてしまったようで、閉古鳥が鳴く状況がしばらく続きました。ここはユニバーサルシアターであり、障がい者のためだけの映画館ではありません。『むしろ、みんなと一緒に観るからこそ、意味がある』ということを使い続けてきて、段々とお客さんが増えるよさになりました。』

「常設館の良さは、まったくユニバーサルシアターという情報を知らずにお越しになる方もいることです。これは、イベント的に続けてきた鑑賞会では得られなかった経験です。ふと訪れた映画館に盲導犬がいるのを見て、驚くと同時に、周囲にその驚きを伝えてくださる人が多くいます。『映画館に行ったら犬がいたんだ。盲導犬だったんだけど、吠えることなく静かだったんだよ』という風に。そんな出会いの在り方はとても自然なことだと思えますし、理解が広まっていく様子をとても嬉しく感じています。』

ユニバーサルシアターと謳う大きな特徴は、冒頭文でも触れた通り、チュプキで上映する作品には

←シネマ・チュプキ・タバタ



必ず、音声ガイド（全座席にはイヤホンを設置）と日本語字幕を付けてきた。同館が人居するビルの2階には作業場があり、ここで作り手の演出意図を丁寧にくみ取りながらバリアフリー版を作成することで、全ての作品で実現させてきた。今や、作成現場に作り手が立ち会う姿がお馴染みの光景となつていくようだ。

### 「パトンを繋ぐ」『こころの通訳者たち』

ここまでは、平塚氏の上映活動の遍歴について紹介してきたが、

その「繋げてきた」姿勢こそが、プロデュース作品『こころの通訳者たち』のテーマには込められている。カメラが迫ったのは、ある音声ガイドづくりの現場風景。長いキャリアを持つ平塚氏にとつても、特別な体験だった。

【すでに訳されているものをさらに訳する】という点で、他の音声ガイドづくりとは大きく異なつた。具体的には、聴こえない人たちにに向けた『舞台手話通訳者たちの手話による訳』を、見えない人たちに向けて『音声ガイドとしてさらに聴覚的な情報として訳する』チャレンジ的な試みだった。

もとなつたのは、2021年2月に上演された演劇『凜然グッドバイ』における舞台手話通訳者3人が聴こえない人たちにも舞台を楽しんでもらうために奮闘した短編ドキュメンタリー『ようこそ舞台手話通訳の世界へ』（ディレクター…越美絵）。

『ようこそ舞台手話通訳の世界へ』で描かれる舞台手話通訳者たちの手話通訳は、通常のものとは異

なり、演出家の指導のもと、通訳者も1人の出演者として役者と同じ衣装を着て、舞台に立って行うものだった。前段として、舞台の劇作家やキャストの言葉を訳すという工程を踏んでいる。そのため、平塚氏が今回取り組んだその手話通訳をさらに別の情報に置き換える作業には大きな責任が伴つた。

音声ガイドづくりの会議には、平塚氏のもとに舞台通訳者、見えない人、ナレーターら様々な立場の人たちが集まった。劇中では時に反対意見も飛び交う場面もあったが、そうしたなかでも、平塚氏

が信じ抜いたのは、訳する（＝伝える）パトンを繋ぐことで、様々な立場の人たちに届けること。パトンを繋ぐためにメンバーの心がひとつになっていく変化がドラマチックなストーリー性を持って映されている。

「手話通訳によって舞台を聴こえない人たちにも開いたものにしてようとしている彼女たち（舞台手話通訳者3人）の情熱や想い、生き様を、私たちは、見えない人たちにも映画として伝えたかった。議論のなかでは、大きな抵抗を向けられる場面もありました。『見えない人たちには、（本来聴こえない人たちに向けた）手話通訳は、要らないのではないか』という意見も出ました。しかしその議論を踏まえることによって、手話の歴史や、手話が聴こえない人たちにとって命と同じぐらい大切な言語であることを知ることができました。それは、本作を観る人にとつても、発見の機会であるはずですが、そうしたことから広がっていく景色が、多くの人たちのこころに届くことを願っています。』



→『こころの通訳者たち』劇中の音声ガイドづくり

©Chupki

# 文化通信 ジャーナル 2022 11

**インタビュー** 社長交代、北海道進出、池袋で記録続々

## 佐々木興業 深化×進化のとき

佐々木武彦 代表取締役社長 / 佐々木伸一 取締役会長



**インタビュー** 平塚千穂子 シネマ・チュブキ・タバタ 支配人

プロデュース作品『こころの通訳者たち』と上映活動の繋げる姿勢

**インタビュー** 前田茂司 楽映舎 代表取締役

小学生に向けた「こども映画学校」を福島から全国展開

**音楽業界トピックス**

第19回東京国際ミュージック・マーケット開催

**映画業界トピックス**

東宝が改組「エンタメユニット」「アニメ本部」設立

**放送業界トピックス**

日テレ、アパレル事業『アウディーレ』発表

**放送業界トピックス**

フジ初の上期AVOD3冠、「silent」初回見逃し配信再生数民放最高

**音楽業界トピックス**

YouTube、ショート動画&音楽ライセンスで新たな収益化方法を発表

**会見レポート**

第35回東京国際映画祭 会場、本数、海外招へい拡大

**記者座談会**

2022年テレビドラマの実写化作品の動向 / 10月公開作品伸びない秋興行の現状も露わ

発行 / 文化通信社